

話題提供者：佐藤 園子

演 題：エコポエティックとは何か？－フランス語圏文学における自然の感応と表象－

開催日時：2023年6月14日，17:00～18:00

開催方法：Zoomによるオンライン開催

1. はじめに

人間と地球環境の関係を問い直そうとするエコポエティックという文学批評の流れが近年生まれている。20世紀のフランス語圏の抒情詩を主な研究対象としている報告者は、あらゆるジャンルの中で最も感情の印の下に置かれてきた「詩」が、この文学批評の新しい試みによって、人間と地球環境の関係を考える上でいかなる意義を見出すことができるかを問うことを目的に話題提供を行った。講演の第一部「エコポエティックとは何か？」では、エコポエティックの歴史・方法・争点を概観した。第二部「エコポエティックと抒情性」では、アルチュール・ランボー (Arthur Rimbaud, 1854-1891) の詩篇「感覚」とフランシス・ポンジュ (Francis Ponge, 1899-1988) の詩篇「牡蠣」を例に挙げ、エコポエティックの観点から具体的に詩の考察を行った。交流会の後半では、人間科学研究科における各研究分野の視点から活発な意見交換と議論が行われた。以下では、質疑応答での議論も踏まえ、発表内容の概要を示す。

2. エコポエティックとは何か？

－ エコクリティシズムからエコポエティックへ

環境文学が最初に発展したのは、アメリカ合衆国においてである。1949年のアルド・レオポルド (Aldo Leopold, 1887-1948) 『野生のうたが聞こえる』に始まり、1962年にはレイチェル・カーソン (Rachel Carson, 1907-1964) による『沈黙の春』が出版される。1970年代以降、『森の生活』の著者として知られるソロー (Henry David Thoreau, 1817-1862) を先駆者とみなし、孤立した自然環境や未開の土地での生活経験を詳細に報告する「ネイチャーライティング」の実践が文学の流派を形成するほどまで広まる。このような文脈で、「エコクリティシズム」という用語が1978年に文学とエコロジーの関係について書かれた論文の中で初めて現れ、1990年代以降主として英語圏で広まり、急速に学問として組織されることになる。

エコクリティシズム (環境文学批評) は、批評対象の倫理的・主題的方法による限定をその第一の特徴とする。倫理的な基準、あるいは主題による基準を設けることで、自然環境に対してより自然主義的なアプローチを取ると考え

られている「記録」に基づくテキストが、従来評価されてきた文学テキストと同列に置かれ、結果として規範となる作品が大きく見直されることになった。一方で、自然主義的なアプローチを重視するあまり、想像の領域を過小評価する傾向が生まれた。エコクリティシズムの第二の特徴は、理論への抵抗である。1990年代に文学理論を席卷していた脱構築主義者たちが、言葉を言語学的・イデオロギー的な構築物として捉え「脱神話化」したのに対して、エコクリティシズムの批評家たちは、感覚的に捉えられる現実を描き出すものとして言葉の世界を捉え、脱構築主義的な理論に反発する傾向にあった。こうした文学理論とその実践が括弧の中に入れてしまっていた「感覚されうる世界」への依拠は、一つの成果であると同時に、エクリチュールと文学形式を無視するという限界も露呈された。さらに、エコクリティシズムは、アメリカ合衆国の大学教育の中でカルチュラル・スタディーズに組み込まれることで、文学批評に留まらず、社会・イデオロギー・政治批評に変質する。テキストは、文学的価値とは別に、政治的正しさによって判断される危険に晒されるようになるのである。

このような文脈で生まれたのが、エコポエティック (環境詩学) である。「ポエティック」という語が使われているが、ジャンルとしての詩だけでなく、詩情や詩的なものの、詩的想像力に重きを置き、言語とエクリチュールの役割に重点を置いた文学批評にその特徴を見出すことができる。さらに、「エコポエティック」という用語の提唱者であるジョナサン・ベイトは、エコポエティックを「場所」を語るための言語のための批評であるとし、環境政策を訴えるための言語を対象とする批評とは一線を画している。エコポエティックが目指すのは、人間と自然との交渉を成立させる基盤であり、その関係が織りなされてきた歴史や文化が蓄積される地点である「場所」に重要な意義を持たせることによって、自然か人間かという二元論を乗り越えようとすることであると言える。フランスでは、イギリスで提唱されたこの用語を受容する形で、近年エコポエティックへの関心が高まっている。

3. エコポエティックと抒情性

抒情詩は伝統的に「個人的な情動 (エモーション) の

「人間科学研究交流会」報告

音楽性を伴う表出」であると定義され、優れて個人的・主観的な感情の名のもとに語られてきた。しかし、情動(émotion)の語源が「内から外へ」を意味するラテン語由来の接頭語「é」と、「motion(動き・運動)」であることから、情動は、詩人を主体性の中に閉じ込めるのではなく、内面から外界へと、世界へと開く運動であると考えられる。この点についてアルチュール・ランボアの「感覚」と題された詩を例に考察すると、「無限の愛」や「しあわせな気分」という言葉で表される詩人の情動の起源には、麦の穂が足に刺さる時の皮膚感覚や、風が額に触れる時の感覚といった触覚を媒介にした人間の身体性と世界の物質性との出会いがあることがわかる。さらに、この出会いは、受動態や使役動詞の使用と、詩人自身の主体性を表す自動詞の未来形の表現が示唆するように、主体と外界との双方向的な出会いである。そして、このような出会いをもたらすものとして、詩の第一行で述べられる「山の小道」という「場所」が意味を持つ。理性の働きとは別のやり方で、すなわち自然に感応することによって、主体は「山の小道」へと足を向けられてしまうのである。

第一節では、「麦」「草」「風」という具体的な事象として捉えられていた自然は、第二節では、「〈自然〉を突き抜けて一」というように、抽象化され、大文字から始まる固有名詞の〈自然〉として、アレゴリー(寓意)的に捉えられる。さらに直後に、「女と行くようにしあわせな気分で」という直喩表現が用いられることにより、アレゴリーとして捉えられた〈自然〉に女性性が帯びる。このような比喻表現によって人間と自然との結びつきが表されている、という肯定的な見方ができる一方で、寓意や直喩といった比喻表現は、自然を擬人化することをめぐる議論と共通の問題点を提示している。擬人化そのものは元より、こうした比喻もまた「人間中心主義」の誹りを免れないのである。そのため、こうした〈自然〉の比喻表現は、客観主義的な文体を採用する詩人が避ける暗礁の一つでもある。

主観主義と人間中心主義を否定し、「客観的な抒情詩」を打ち立てたのが、フランシス・ポンジュである。客観的な抒情詩とは、詩人の情動が外へと向かう動きとして、事物そのものの視点からの描写という客観的な努力が要請されて書かれる詩である。ポンジュの志向する客観的な抒情詩は、人間が事物に対して絶えず投影している価値や意味を剥ぎ取ることで、人間が所有し、存在を弱めてしまっ

ている事物に対する見方を変える。それと同時に、主体もまた事物の振る舞いや、事物がもたらす感覚によって、知的・倫理的・感情的な変化を受けるのである。客観的な抒情詩を書くための方法として、ポンジュは、科学的な分類を参照するのではなく、十分に共有され、習慣化された認識の順序を参照する。「牡蠣」と題された第三節からなる詩は、第一節が牡蠣の殻の部分、第二節が殻を開けた後に出てくる牡蠣の実の部分、第三節が、ごく稀に牡蠣の中に入っている真珠の描写になっており、それぞれの節の言葉の分量が、殻、中の実、真珠の質量と釣り合うように構成されている。さらに、言葉のリズムや音素の面でも、事物そのものの視点からの描写が試みられている。たとえば、詩の第一節では、フランス語の子音のうち、口蓋部分を震わせて発音する「r」の音が多用されており、この音素の連続により、聴覚的に、そして声に出して読む時の口の喉の奥の感覚として、牡蠣の殻のゴツゴツとした感じが感じ取られ、ポンジュの言葉を借りるならば、読者に「喜びの種を与える」のである。

4. おわりに

近現代の抒情詩は、自分自身と世界の「主」・支配者としての主体という考えを白紙に戻し、代わりに現れるのが、内的・外的な他性との関係の中で生起する「関係性の主体」である。また、抒情詩において試みられるのは、感覚を媒介にした世界との感情的で親密な関係の構築である。こうして、個人的・主観的な感情の名のもとに語られてきた抒情詩は、常に他の人間や非人間の生き物、外界と関係している「私」という主体を、自己と世界と言葉が互いに動き合う一つの「場所」にしたということができる。その意味で、必ずしも自然環境保護主義的な立場を取らなくとも、あるいはエコクリティシズムのように理論や理性で読者の行為を導く点に重きが置かれていなくても、詩は自然のイメージを新しくし、前代未聞の形式を作り出すことによって読者の心に変容をもたらし、その結果として行動の変容が促される点において、環境保護にとって重要な役割を果たすことができる。

※本報告は、[JSPS科研費JP21K20026](#)の助成を受けたものです。